



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 341号 2011.4.18 発行 社会政策研究所

ようやく各地から日常の活動や催しのニュースがふんだんに届くようになりました。全国各紙のニュースをお楽しみください。【kobi】

障害者も乗れるタンDEM自転車 あおぞら財団が貸し出し

大阪日日新聞 2011年4月17日

大阪市西淀川区千舟1丁目のあおぞら財団（村松昭夫理事長）が3月から2人乗りのタンDEM自転車のレンタルをスタートさせた。運転手とこぎ手を別にするができるため、障害者でも乗ることが可能。個人で利用のほか、地域のイベントなどに貸し出されている。



あおぞら財団がレンタルを始めたタンDEM自転車

貸し出されているタンDEM自転車は、縦に座席が取り付けられているもの。前に乗る人を「パイロット」と呼び、運転を担当する。後部座席は操作する必要がないため、目の不自由な人でも自転車を体感することができる。

同財団では環境改善などの視点から、自転車普及に力を入れており、タンDEM自転車についてイベントなどで紹介をしていた。昨年末、八尾ライオンズクラブから日本ライトハウスを通して、同財団に3台、貸与され、一般へ貸し出しすることを決めた。

1カ月の間に淀川区でのイベントなどに貸し出したほか、個人でも申し込みもあったという。同財団の研究者、小平智子さんは「視覚障害のあるご主人が後部座席でペダルをこいで、奥さんがパイロットとして運転。夫婦でサイクリングができるという人もいた」。

担当している同財団の藤江徹事務局長は「視覚障害者にとっては自転車は生活の邪魔をする『敵』だった。しかし、会議の中で実は乗ってみたいという声も耳にした。今後、パイロットの養成講座なども行い、普及に努めていきたい」と話している。

レンタル料は個人では1日500円、団体では1日2千円となっている。法律上、公道を走れない車種もあるが、その場合は同財団前の大野川緑陰道路を体験走行する。問い合わせは電話06（6475）8885、同財団へ。

知的障害者ら給食袋作り寄託 被災地の子どもに

中日新聞 2011年4月17日

被災地の子どもたちに送る給食袋を作った作業所利用者ら＝大津市浜大津の市社会福祉協議会で

知的障害がある人が織物やクッキー作りに取り組む大津市平津の福祉作業所「れもん会社」が、東日本大震災の被災地の子どもに送る給食袋100枚を作り、募集していた市ボランティア連絡協議会に寄託した。



協議会が県民に呼びかけていた募集事業に支援してもらうばかりでなく人の手助けがしたいと応じた。

作業所に入入りしているボランティアが、縦28センチ、横20センチのきんちゃく型の袋を作り、7センチ四方のハートマークを付けた。作業所の利用者は袋のひも通しを手伝い、手紙に「応援しています」「直接お手伝いしたい」などメッセージを書いて袋に入れた。

作業した利用者3人らが、ボランティア連協のある市社会福祉協議会に持ち寄った。作業所の職員は「被災地のために利用者と一緒にはできないかと思い、製作した。利用者の思いが伝わってほしい」と話した。（曾布川剛）

障害者が育てたナデシコの苗、今年も配布へ/平塚

神奈川新聞 2011年4月17日

薄紫の花を咲かせた平塚市の花ナデシコ

平塚市の市の花ナデシコの美しさを楽しんで一。同市高根の知的障害者支援施設「進和あさひホーム」の利用者が丹精込めて育てたナデシコの苗が今年も、29、30の両日に同市大原の総合公園で開かれる緑化まつりなどで無料配布される。

同ホームを運営する社会福祉法人進和学園と施設利用者で組織する自治会などが「日ごろお世話になっている地域への恩返し」として、毎年行っている恒例行事。

今年も緑化まつりの来場者向けに計800鉢を用意した。また、同市山下の旭南公民館では19日から21日までの3日間で計300鉢を配布する予定だ。7月初旬ごろには薄紫色のかれんな花を咲かせるという。



思い思いの演奏障害者ら披露 JR岩国駅

読売新聞 2011年4月18日



演奏する「しらかばフレンズ」のメンバー

障害のある人らが音楽を披露する「みんな輝け!! ひかりコンサート」が17日、岩国市のJR岩国駅で開かれた。15団体・個人が思い思いに楽器を奏で、通行人ら約300人が聴き入った。

音楽を通じて障害者支援に取り組む市民グループ「コンチェルト」（中村桂子会長）などが主催し、3回目。岩国総合支援学校高等部の生徒2人のデュオ「FLAP—奨大」のピアノや、身体障害者らでつくる「あゆみの会」（吉木政江会長、約20人）のハンドベルなどが披露された。

市内の就労支援事業所しらかば園の利用者らによる「しらかばフレンズ」は、聴衆の手拍子を受けながら、「ひょっこりひょうたん島」など軽快な曲を演奏。マラカスを担当した斉藤由美さん（18）は「上手にできた。みんなに喜んでもらえてうれしかった」と満足そうだった。

障がい者就職支援 八重山に開所

沖縄タイムス 2011年4月17日

障がい者の就業促進へ向け意気込む「どりいむ」スタッフ=石垣市真栄里・同センター

障がい者の就職や職場への適応、生活習慣づくりなどをサポートし、自立を促す「障害者就業・生活支援センター



どりいむ」(津嘉山航センター長)が14日、石垣市真栄里に開所した。スタッフには社会福祉士や精神保健福祉士らに加え、県内5圏域では唯一となる臨床心理士も配置。利用者を精神面でもケアしながら就職相談や職業訓練、生活面での支援などを実施する。

八重山地区での同センターの開所は初めて。

開所式ではセンターを運営する社会福祉法人わしの里の栽里秋理事が「利用者一人一人の事例を常にスタッフ全員で検討し、モニタリングしていく」と手厚い支援態勢を説明。「ハローワークなどとネットワークをつなげ、働きやすい職場づくりや働きやすい事業所の開拓にも取り組みたい」と抱負を語った。

津嘉山センター長は「障がい者雇用について、とにかく地域の理解を求めていく。一人一人の素晴らしさや能力を理解してもらい、事業者とのマッチングや職場への定着を図っていききたい」と話した。

同事業所は2008年以来、県や八重山3市町の障がい者相談支援事業や就業支援事業、委託訓練事業などを受託。今年1日、国と県に障がい者就業・生活支援センターとして指定された。県委託の就業支援事業の08～10年度合計では登録者数延べ91人、就職件数延べ41件の実績がある。

利用時間は午前9時半～午後5時半で、土日と祝日は休み。電話0980(87)0761。

障害者サッカー 夢はもうひとつのW杯



朝日新聞 2011年04月17日
練習試合でボールを追いかける選手たち=鹿児島市郡元1丁目

県内初となる知的障害者の県代表サッカーチームが誕生した。全国大会への出場権獲得を目指し、5月15日に大分市で開かれる九州地区予選会に臨む。指導者は、鹿児島から「もうひとつのW杯」に出場する選手を育てたいと夢を描く。

「前、前」「声出して!」。9日、鹿児島市郡元1丁目の鹿児島大付属中グラウンド。緑色のそろいのピブスを身につけ、知的障害者の選手

11人がボールを追いかけて走り回った。中学校との練習試合だ。

主なメンバーは13～21歳の知的障害者の男性約30人。知的障害者サッカー競技九州ブロック地区予選会に出場するため、昨年11月から毎月2回ほどの練習をこなしてきた。

「健常者と何ら変わらない」と、チームを発足させたNPO法人「スポーツライフかごしま」の白石明史さん(45)。違うのは全員が知的障害者であることを示す療育手帳を持っていることと、試合時間が20分ハーフ、選手交代は何人でも可能とルールが少し異なるだけだ。監督を務める元ヴォルカ鹿児島の西真一さん(38)は「障害があるからと特別なことはせず、普通にほめ、普通に怒ります」と話す。作戦や指示も大抵のことは理解できるという。

「もうひとつのW杯」とは4年に一度開かれる知的障害者のサッカー世界大会の通称だ。白石さんが「この大会に出場する選手を育てたい」と思ったのが、チームづくりのきっかけだ。

昨年5月に県内で初めて開いた知的障害者のフットサル大会に出場した養護学校に声をかけるなどして選手を集めた。養護学校に部活動はなく、本格的なサッカー経験者はいない。最初はシュートやドリブルなど基礎練習から始めた。

主将を務める会社員の大田直人さん(21)は「障害者がみんなで一つの目標に向かっ

て何かするということはありません。サッカーで交友関係が広がったし、チームの雰囲気はよくなっている」と話す。

9日の練習後に試合の登録メンバー20人のうち17人が発表された。FWとしてメンバー入りが決まった大田さんは「練習に付き合ってくれるバックの人たち、ベンチから声をかけてくれる人たちのためにもチャレンジャー精神で頑張りたい」と意気込む。

各県選抜チームが集まる九州地区予選会で優勝すれば、10月に開かれる全国大会に出場できる。「まずは1勝」。選手たちの思いは、九州制覇、全国出場、そして世界へと広がっている。(城真弓)

福島県の知的障害施設を丸ごと受け入れ 高崎・のぞみの園



朝日新聞 2011年4月17日
歓迎のセレモニーで「友愛会」の職員たちがあいさつ。寺島利文さん(左)は「本当にうれしく思う」と声をまらせた。=高崎市寺尾町

避難指示圏内にある福島県富岡町の知的障害者施設の利用者らが15日、高崎市寺尾町の国立重度知的障害者総合施設「のぞみの園」で新たな生活を始めた。

社会福祉法人「友愛会」系列の施設利用者67人と、職員やその家族46人。

同会事務局長の寺島利文さん(57)によると、同会は障害者支援施設やグループホーム、授産施設などを運営している。

東日本大震災が起きた3月11日。自宅から通っていた利用者や職員らも含め、約70人が支援施設で不安な一夜を過ごした。

「原発が危険です。避難してください」――。

翌朝、消防団がやってきて避難を促した。ほぼ着の身着のままマイクロバス2台に分乗し、避難先を探した。いくつかの村を訪ねたが、どこも「いっぱいです」と断られた。

「一部なら受け入れられるが、その他の人は別の避難先を探してほしい」と告げられたことも。寺島さんは「全員の面倒を見る」ことにこだわった。夕方、やっと福島県三春町の公共施設が受け入れてくれた。

「避難先探しでは『早い者勝ち』の面があった。障害者は弱い立場なのに」と寺島さん。

三春町では食事も暖房もあり、その点に不自由はなかった。一方で、大部屋での共同生活でストレスを感じる利用者もいた。福島県の依頼で群馬県が調整した結果、のぞみの園と高崎市の公営住宅が受け入れることになった。

同園には約350人が入所しているが、空いていた寮を活用したり、施設を改修したりして人数分の受け入れ場所を確保。67人の利用者は寮など3カ所に、職員は近くの雇用促進住宅などに入居した。寺島さんは「これで利用者もリラックスできると思う」と喜ぶ。

一方で、以前は自宅から通っていた利用者も施設に入るため、夜間に必要な職員数が増えた。1人暮らしをしていた利用者も相部屋になるため、環境が変わることも心配だ。

「戻れるならいつでも富岡に戻りたい。戻れるめどが立たないのがつらい」

寺島さんがため息をついた。(新宅あゆみ)

停電が命の危機に直結 被災地の在宅重度障害者

朝日新聞 2011年4月18日 8時30分
生きている喜びをかみしめる菊池さん一家。左から父俊二さん、裕子さん、母紀子さん=岩手県釜石市甲子町、本田写す

東日本大震災の余震が続く中、被災地には、停電が命の



危機に直結する重度の在宅障害者がいる。避難所での集団生活は難しく、電動のたん吸引器や人工呼吸器が必要な人たちだ。自動車からの電源でしのいだり、緊急入院を余儀なくされたり……。家族や周囲の懸命な介護で乗り切ろうとしている。

岩手県釜石市甲子町の菊池裕子さん（27）は生後10カ月で過ぎて風呂の残り湯に落ち、脳障害から体が不自由になった。居間のベッドに寝たきり状態で、母の紀子さん（61）がつきっきりで介護してきた。

流動食の食事や薬を1日3回、鼻から管を通して送り込む。むせてせき込むなど体がこわばる兆候が出るたびに、電動吸引器でたんを吸い出さないと、すぐに呼吸困難になる。

あの日、大きな揺れで棚のものが次々と落ち、裕子さんはパニック状態に。紀子さんはとっさに裕子さんの上に覆いかぶさり、抱きしめて守った。父の俊二さん（63）は日課のウォーキングで外出していた。急いで帰宅すると、裕子さんはおだやかな顔に戻った。

しかし、地震と同時に停電。裕子さんの呼吸を見ると、たん吸引の必要が迫っていた。俊二さんは機転を利かせ、玄関前の乗用車のエンジンをかけてシガーソケットから電源を取り、延長コードで吸引器につなぎ、ことなきを得た。

停電は続いた。残っていたガソリンは3分の1程度。「電気が戻るか、ガソリンがなくなるのが先か」と案じる日々が続いた。窮状を知った親族がガソリンスタンドに並び、今日は3リットル、次の日は10リットルと届けてくれた。

暗闇の中、ろうそくと懐中電灯で流動食の準備と注入、たん吸引をする夜は6日間続いた。地震から6日目の16日午後5時50分、電気が戻ったときは家族3人、拍手で喜んだ。

大きな余震がくると裕子さんは取り乱して泣き出すこともあるが、紀子さんは「支えてくれる人がいっぱいいて、ここまでこられた。この子の笑顔は私たちを救ってくれています」と話す。



岩手県陸前高田市立高田第一中学校3年の菅野優希君（14）は脊髄（せきずい）性筋萎縮症。2歳のときに発症した。

家でも学校でも特注の車イスで元気に走り回るが、筋肉が日々衰えていて、集団生活での寝起きは困難だ。体力が弱く、風邪などもひきやすい。夜は、呼吸困難になるために人工呼吸器を装着する。

地震初日、優希君は同級生らと体育館に避難。市内はほぼ全域が停電だったため、担任教諭らが救急隊員に事情を説明し、かかりつけでもある県立大船渡病院に緊急入院した。

今も停電が続く家には戻れず、母の光子さん（37）は自閉症児の弟、小学6年生の星樹（としき）君（11）を連れて毎晩、同じ病室の床に泊まり込んでいる。余震があると興奮気味の星樹君も手足の不自由な兄にご飯を食べさせ、おむつを換え、お風呂で体を洗ってあげる。

停電の自宅では、夫の雅人さん（47）と義父母が待つが、避難所にいないため支援物資の配給もないし、風呂にも入れない。在宅障害児が帰宅できるめどはない。

岩手県重症心身障害児（者）を守る会（平野功会長）によると、県内の被災地沿岸部にはこうした在宅重症者は25人、病院や施設に入っている人たちは約80人いるという。（本田雅和）

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行